

ボランティア活動における学生の主体性発揮を育てる方策の検討

○ 佐久大学 野坂 洋子 (7313)

島田 千穂 (佐久大学・5611), 高松 誠 (佐久大学・7441)

[キーワード] ボランティア, 主体性, エンゲージメント

1. 研究目的

学生ボランティアの歴史は、1923年に発生した関東大震災を機に東京帝国大学をはじめとする大学人と学生によって発足したセツルメント活動に遡ることができる（佐々木ら2018）。また、大学生の主体性促進に関する先行研究としては、大学生の学習や臨地実習、ボランティア活動を対象としたものがある（川田2021, 畑野・原田2014, 古谷2011）。学生ボランティア活動における主体性を高める方策を検討する上で、学生の認識に着目することが重要である。しかし日本で、大学内のボランティア活動における主体性については、断片的に明らかにされているにすぎない。エンゲージメントについては、学習活動や社会経済活動に着目した研究は見られるものの、無償性を伴う学生ボランティア活動に着目した研究はみられない。

よって本研究では、ボランティア活動における主体性を高める一つの要因として、エンゲージメントに着目し、学生ボランティア参加者の活動頻度との関連を分析して、主体性を高める方策の検討を目的とする。具体的には、ボランティアへの活動頻度が高い学生は、低い学生と比較して、活動に対するエンゲージメントが高いという仮説の検証を行う。

2. 研究の視点および方法

一般企業等においても人材不足という問題を抱える中で、解決の方策として、パフォーマンスを規定する動機付け概念であるエンゲージメント(engagement)が注目されている。エンゲージメントとは、kahn(1990)によって「パーソナル・エンゲージメント」という名称を用いて概念化されたものである。近年では、児童の学習活動におけるエンゲージメントが重要視され始めており、達成行動やその成果としてのパフォーマンスを予測する変数として注目されている（鹿毛2017）。この視点を、本研究が焦点を当てている若い世代によるボランティア活動の人材確保と自発性に関する検討においても応用できないかと考えた。

よって本研究では、A大学にて行われているボランティア活動に参加した学生を対象に、ボランティアガイダンスへの参加と登録をした上でボランティア活動に参加してもらい、活動期間終了時に、活動状況とエンゲージメントに関するアンケート調査とフォーカスグループインタビュー調査による混合研究法を用いた。これにより、エンゲージメントが大学生のボランティア活動参加に及ぼす影響についての検討を行った。

3. 倫理的配慮

本研究は、佐久大学の倫理審査委員会の承認（承認番号：第 2022017 号）を得て実施した。調査実施には、調査協力者に文書もしくは口頭で調査内容の説明を行い、調査協力の同意を得て実施し、執筆においては「日本社会福祉学会研究倫理規定」及び「研究倫理規定にもとづく研究ガイドライン」を熟読し作成した。

なお、本報告に関連し、開示すべき COI 関係にある企業等はない。

4. 研究結果

量的調査の結果からは、主体性を促す要因としてエンゲージメントと関連が見られなかったことを受け、本研究においてエンゲージメントは質的に捉えられるものかもしれないと考えた。よって、フォーカスグループインタビューの語りにおけるエンゲージメントに関連した経験がどのようなものかに着目し、外山（2018）4つのエンゲージメントに、環境との接点にも着目した溝口ら（2022）が作成した「大学生生活エンゲージメント」「学業的エンゲージメント」「情緒的エンゲージメント」の3つを加えた7つのエンゲージメントとその概念説明を用いて分析を行った。その結果、活動に参加した学生はエンゲージメントに関連した経験をしていたことがわかってきた。

5. 考察

①学生のエンゲージメントに関連した経験

活動に対するエンゲージメントが高い方向に偏っているメカニズムとして考えられたのは、学生の内面で【非日常感】や【楽しみ】、【自分自身の成長】という感情的エンゲージメントと状态的エンゲージメントが相互作用し、活動に対するエンゲージメントを高めているようだった。さらに、外的環境との【つながり】という情緒的エンゲージメントが学生の内面と相互作用している様子が見出された。

②学生の内面に生じ得る葛藤をふまえた段階的な関わり

活動プロセスにおいて、個々の学生の内面には『積極的にいけない自分』という【活動を抑制する要素】が存在していた。この背景には例えば、「もっとたくさん当番を担いたいが、自分だけ張り切っていると思われたくない」等の葛藤があるようだった。この葛藤を弱めるための外部からの働きかけの一つに、運営者側による学生の段階に合わせた関わりの有効さが推測された。

③ボランティア活動における学生の主体性を高める方策の示唆

活動に消極的な要因と解決策の確認を行うこと、マイクロレベルのエンゲージメントのみならず、他者や所属組織等のメゾレベルとのつながりに関連したエンゲージメントにも着目してみることで、運営者側が熱量を持ち、自らも参加したいと思えるボランティア活動を企画することの3点を示唆した。